

2018年7月  
1142号

# 万葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5  
(一冊の会研究室)

## 国連の流れと共に歩む、学ぶ

～7月櫻華塾～

梅雨も終わり、サンサンと太陽が輝く中、7月の櫻華塾を開催しました。今回は各グループのリーダーと若手メンバーが出席し、皆で丸く机を囲んで、いつもよりお互いが近い距離での勉強会です。大槻会長が一冊の会を立ち上げた時は30歳代。当時の大槻会長と同年代の若手メンバーは昨年研究生となり、今年の櫻華塾は皆勤賞。新しい一冊の会を先輩方と築いていけるようにという強い思いで勉強に励んでいます。



### 7月11日釜石市での祈念植樹開催

東日本大震災で、甚大な被害を受けた岩手県釜石市。一冊の会で持続して活動している復興祈念樹の植樹がこの度釜石市で開催されることになり、6月29日、日差しが強い中大槻会長と小山副会長が打ち合わせの為に釜石市を訪れました。第二次世界大戦中に焼夷弾により荒廃した釜石市。復興のシンボルとして建築されたのが釜石市役所です。三陸地方はたびたび大地震・津波に見舞われていたので防災教育に力をいれておりました。2011年の大震災・津波におそわれたにもかかわらず普段の防災訓練のおかげで犠牲者も少なく「奇跡の釜石」と言われている市です。釜石市役所での打ち合わせでは、山崎副議長の他、佐々木総務課長、山田教育委員会総務課長、石黒主査と3人の女性リーダーを中心に「復興祈念樹」の記念植樹の打ち合わせをしたとのこと。女性リーダー達の細やかな対応により、素晴らしい「祈念樹」となることでしょう。植樹当日は一冊の会で被災地と心を通わせようと、支援者からのメッセージ、海外からのメッセージ、被災者からのメッセージを三色のハンカチに托して、植樹会場を飾ることを予定しております。(ハンカチプロジェクトの詳細は万葉1092号にて紹介、植樹の様子は万葉次号にて紹介いたします。)

### 世界から日本を視る、過去から現代を考える—新聞記事を読んで

一冊の会は常に最新の知見を学んでいます。3人の若手の研究員が、新聞記事を読み学んだことと感じたことを発表しました。

〈〈城杉研究員〉〉今年野口英世が黄熱病の研究中にガーナ共和国でたおれてから90年の節目の年です。1927年の黄熱病の研究の為にガーナで研究をしている最中に自ら黄熱病に感染しガーナの地で亡くなった野口英世。人々を黄熱病から救う為命を懸けて研究した野口英世を称え、ガーナ大学では野口記念医学研究所が設立され、現在は西アフリカを代表する研究機関となっています。その研究所で、当時の野口英世の解剖の所見録が確認され、今年の5月ガーナ大学から福島県猪苗代町にある野口記念館へ寄贈されたのです。野口英世の精神を引き継いだ日本とガーナの人々が交流を行い、その絆は更に深まっているのです。私達も活動を通して絆を大切に、後世へと繋ぐことでその絆を更に深いものとしていきたいです。

〈〈赤田研究員〉〉6月23日の「慰霊の日」は、沖縄の組織的戦闘が終結したとされる日です。沖縄では全戦没者追悼式が開かれ、鎮魂の祈りに包まれました。不戦を誓い、平和とは何かを考える一日。一方昨年、読谷村の自然壕「チビチリガマ」が少年たちによって荒らされたという胸を痛めるような悲しいニュースがありました。戦争の残酷さ、非情な経験を風化させてはいけません。なぜ平和が大切なのか、ということの後世へ語り部として引き継いで参ります。

〈〈山内研究員〉〉英国のメイ首相は今年1月に、「孤独(寂しさ)」担当大臣を創設する決断を明らかにしました。孤独担当大臣は今後関係各省庁や地方自治体などと連携しながら、国家的政策課題として社会の人々の孤独感への様々な対応を検討していくことになる。これは異例なことだが、今まさに孤独というテーマは極めて世界的な問題となり、高齢化が進むどの先進国にも共通する課題です。日本でも孤独死の件数が年々増えており、2015年のデータでは東京23区内だけでも3000人を超えているのです。孤独の問題には政府、地方自治体のみならずNPO/NGOの力も必要です。一冊の会の様に皆、手を取り合って同じ目標に向かって皆で進んでいく、そういった活動が今後更に評価されていくのではないのでしょうか。小さな事からしっかり取り組んで参ります。

## 江戸入府 430年（2020年東京五輪）家康が築いた TOKYO

世界が注目している2020年の東京オリンピックまであと2年。世界有数の都市、東京の成り立ちを勉強して参りましょう！江戸幕府を築き上げた徳川家康が開発した江戸。難攻不落と言われた江戸城の建設、城下町の開発、更に当時の市民の生活を支えた水運力を新井事務局次長が発表されました。

江戸城を築いた100万個以上の石材を当時伊豆半島の初島から切り出し運び、江戸城の周りに濠をめぐらせて、水路を引き、人が住めるように土地を開拓するなど、今の東京の原型はこの時にできたのです。特に水路は物流の手段としても大いに活躍し、産業の発展にも大いに役立ちました。江戸から東京が変わって150年、隅田川の花火も300年、高速道路も9割は水路の上を走っています。今や私たちの生活は水と縁の切れないものとなっております。先人の努力、犠牲の上に今日の東京の繁栄があることに感謝して参りたいと思います。

### 7月18日マンデラさんの国際デーに思いを寄せて（大槻会長より）

今年、ノーベル平和賞を受賞したネルソン・マンデラさんの生誕100周年です。2009年に国連はマンデラ氏が生まれた7月18日を国際デーの1つに決めました。67年間マンデラさんが持続して活動をした貧困撲滅運動、他者への思いやりの精神を称え7月18日は社会貢献活動を67分間行うことを、国連はマンデラ財団と共にお願いしています。

一冊の会の原点の活動である識字教育は「幸せの架け橋」として子どもたちの未来を創ってきました。1967年大槻会長は日ごろ行っていた社会福祉活動の会に「一冊の会」と名付け、当時神田に事務所のあったANCに鉛筆等の文具支援を行いました。ANC駐日代表のマツエラ氏から自転車を20台支援して欲しいと依頼があり、大槻会長は中古の自転車を集め、整備し、ペンキを塗って神田の事務所まで運んだそうです。その時の真心をマツエラ氏は大変感謝され、ANCの事務所が閉所する際、当時社民党代表であった土井たか子氏と世界の差別撤廃条約委員長であった林陽子先生、そして大槻会長と小山副会長を立会者として指名され、ANC閉所の歴史的瞬間を会長は体感されました。何年後かの第一回アフリカ開発会議でマンデラ氏に会われた際、自転車の支援を心から感謝されていたとのこと。まさに大きな歴史を一冊の会は築いているのだと再認識しました。

### 石田理事長から本日のまとめ

2016年に宮城県知事にお会いした際に「ハード面の復興はほぼできた、これから5-10年は心の復興」とおっしゃっていましたが、今日の大槻会長の話を聞き、釜石はまだ大変な状況であると感じました。一冊の会の良い点は、支援する人の顔と支援される人の顔がよく分かっていることです。もちろん、国や大きい団体が行う、同一の物品を大量に供給するような支援も必要でしょうが、一冊の会が行うべき支援はそうではない、我々が行うべき「顔の見える心の支援」は我々が請け負っていく必要があります。

大槻会長が人種差別について触れられましたが、誰でも口では「無くしたい」と言いますが、人間誰しも少しは差別の意識があるかもしれません。「自由の国」と言われるアメリカにも、60年前までは差別があったわけです。今、EUは移民に対して厳しくなっています。もちろん経済的な問題や治安の問題もありますが、顔が違う、文化が違うといった差別もあるわけです。そういったものに対して国連の流れの中にある一冊の会は敏感でなくてはなりません。

山内さんが発表した「孤独」という問題は、先進国が共通して抱えている問題でもある。地域コミュニティを復活させていくことは大切ですが、以前と同様にとすることは難しい。地域の力は、時として、しがらみや利害関係を生んで、そこで苦しむ人も出てくる。今日、ここに集っている方は東京周辺の方だと思いますが、こうした集いも1つのコミュニティです。土地だけでのつながりではないコミュニティにも孤独を癒やす力があり、これからの時代に注目されていくものだと思います。一冊の会の可能性はまだ秘めているものがあります。

さて、東京というキーワードができましたので、東京市長であった尾崎に触れておこうと思います。市長になる前の尾崎は、どちらかというと天下国家について論じていましたが、市長であった9年間は多摩川水源の確保をしたり、ガス会社に投資したりと、非常に実践的です。先人が築いた江戸というインフラがあり、それをさらに尾崎が整備をしたのだと今日は感慨深く発表を聞きました。

野口英世についても発表されましたが、以前野口英世記念館の人に呼ばれて相馬雪香が講演会をしたことがありました。相馬先生は難民の支援など野口に通じるものがあると言ってもらえ、相馬雪香も照れ笑いをしていたことを懐かしく思い出します。日本が世界のために役に立たなければ日本が世界から孤立してしまう、相馬雪香にはそのような思いがありました。野口英世とも、もしかしたら通じるものがあるのかもしれない。

最後に…、戦争はよくない、ということも当たり前です。私は広島出身なので、祖母からも話を聞きました。核兵器が良いとは誰も思いません。理想は忘れてはいけませんが、政治の世界は現実の選択の繰り返しです。政治に理想を吹き込む努力は必要ですが、空論を展開しても仕方ありません。目指している頂上は同じでもあっちから登る人、こっちから登る人がいます。現実的な人、完璧な手段を求める人…様々です。一冊の会は草の根のネットワークとしてできることをやっていかなければと思います。皆さん、共に頑張りましょう。



文責：城杉研究員 赤田研究員 記録：平間研究員